2012年度入学試験問題

国　　語

（試験時間　15：00～16：00　60分）

1．解答用紙は，記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。

2．解答は，必ず解答欄に記入してください。なお，解答欄以外に書くと無効となりますので注意してください。

3．解答は，HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し，訂正する場合は，プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に，マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。また，折りまげたり，汚したりしないでください。記述解答用紙の下敷きにマーク解答用紙を使用することは絶対にさけてください。

4．解答用紙には，受験番号と氏名を必ず記入してください。

5．マーク解答用紙の受験番号および受験番号のマーク記入は，コンピュータ処理上非常に重要なので，誤記のないよう特に注意してください。

一　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（50点）

何週間か週末の深夜に世田谷の街を車で走り抜ける日が続いた。夜半の十時過ぎ。住宅街だからそこそこ暗い。しかし、世田谷通りや小田急線、京王線の駅近くに車が差しかかると風景は一変する。煌々たる照明の大型飲食店がいたるところ軒(1)を連ねて、我が物顔で一帯を支配している。車窓からその光景を眺めるのは(2)不思議な感覚だ。

店名を記した大きなネオンサインが、よくぞ住宅地の真ん中でというほど原色の光を放っている。見慣れたファミリーレストランが大半で、そこにアジアなどエスニック系のこれもチェーンの店舗が混じり合う。世田谷が高級住宅街だというのなら、店の過半は相対的には随分と庶民的だ。店名だけではない。セット料理などのメニューを大書したポップ文字の看板もグッドデザインとはいいがたい。それらが夜半の空間を跋扈している。

都市の装置として見たとき、不思議な思いを抱くのはわたしだけではあるまい。個々のレストランは、もちろん独立した建築である。しかし、それらは本当に自立しているのだろうか。ネオンサインも街頭に張り出したポップ広告も、店内の照明や客席の椅子やテーブルも、すべてがチェーン化という過程のなかで規格化されて、そこの立地による事情など顧慮されずに持ち込まれている。

建築家が介在せずにそれらの建築が建つことはありえないのだが、わたしたちが認識してきた都市と建築の生成過程とは異なる経路で、風景が出現してしまう事実に注目したい。

即物的な商品があけすけに街路沿いに並べられている。現実を直視するなら、わたしが夜の車窓から数週間にわたって見続けた光景は、そう断じられるべきであろう。デニーズ様式、スカイラーク様式とでも括れそうなそれらのレストランは、(3)建築であって建築ではない。テーブルにこれもマニュアル通り置かれた食器やメニューのカード一枚一枚にまで規格化による合理性が実現されている。ゆえにすべてひっくるめての究極のパッケージ商品なのだ。

ネオンサインの商標を見て、利用者はそれらの商品の価格設定とサービスの等級を瞬時に理解して購入を決断する。一般に飲

食店は入店の時点で消費行動の過半が規定されてしまう。品定めして買うか買わないかを判断する百貨店などと違い、入店して飲食物を発注しないひとはいないからだ。チェーン化された飲食店はその意味において、もとより建築ではなくパッケージされた商品としての性格を色濃く帯びている。利用者は夜の住宅街をハンドルを握ってクルージングしながら、どれを「買う」かという品定めの視線で、都市の風景を走査（スキャン）している。

それを是とするか非とするかはともかく、わたしの目には「空恐ろしい」光景と映る。繰り返していうが、「建築」を選んで駐車場に車を入れるのではない。並んでいるのはチェーンを統括（とうかつ）する本部が計算し尽くして練り上げたパッケージなのだ。

(4) を引き金に、以前どこか別の場所で刷り込まれた「商品知識」が起動し、商品を選択するのである。だとするなら、都市の表層に並ぶそれらの「建築」がつくる景観は、地域ガイドを装う折り込みちらしに散りばめられたレストランガイドの類に近い。つまり、わたしたちの空間はそこまで (5) されてしまっているのであり、都市を徘徊（はいかい）する行為は今やコースメニューを飾りたてたちらしのスキャンに(6)ダしてしまいかねないのである。

現地語しか通じないヨーロッパの地方都市で手早く昼食を済ませたいとき、わたしだってマクドナルドのハンバーガーのお世話になる。言語を超えたサービスプログラムへのせっぱつまっての屈伏は、ごく素朴に米国流グローバリズムの恩恵を蒙（こうむ）る瞬間でもある。思うに、世界各地でマクドナルドが歓迎され、また、その一方で景観破壊の象徴とされるのは、バーガーショップが、単なる建築やレストランではなく、完璧なまでに合理化された「商品のパッケージ」だからだろう。

同じようなパッケージ化の視点に立つなら、スターバックスコーヒーなどの米シアトル系のカフェチェーンもそこに加えても良いかも知れない。しかし、既存のカフェ空間をなぞるようなスターバックスには、マクドナルドほどの徹底がなく、(7) が少なからず感じられる点において商品パッケージならではの強烈な存在感は希薄だ。だから、マクドナルドほどは嫌われない。

マクドナルドの個々の店舗は世田谷のファミリーレストランほど大規模ではないし、実際にはそれほど景観を破壊しているわけではない。それでも「生活」を浸食してくると警戒されるのは、やはり商品パッケージとしての徹底があるからだ。ファミリーレストランに関していうと十数年前にも、東京なら練馬以北の環状七号線沿いにはすでに当たり前のように存在していた。

都心の近傍でありながら自動車交通が不愉快さを撒き散らし、通行人の姿さえ見かけない場所がその舞台だった。米国流のロードビジネスによる風景の浸食は今に始まったことではないし、現に地方中核都市のほとんどが[8]病んだ風景を抱えている。モータリゼーションとはそういうものなのだ。だが[9]事態はより根源的な次元で変化しつつあると認識すべきだろう。

マクドナルド、そして同じく米国流の文化帝国主義の[10]センペイと見なされるコカコーラを例にとるなら、それらはマスメディアに乗って大衆のなかに浸透する形で自己増殖を続ける図式を先導してきたといえるだろう。テレビ、そして古くはラジオがその片棒を担いだ。それは米国の大衆社会の副産物、いや主製品であり、メディアによる浸透があって初めて世界商品となり得たのである。だとするなら世田谷の店舗群はどうだろうか。それらが大げさにテレビスポットを流しているのを見かけたひとがどれだけいるだろう。それなのにハンドルを握るひとびとは、路傍で輝くネオンサインのロゴタイプを一目見ただけでサービス内容を理解して、駐車場に車を入れるためにウインカーのスイッチを入れてしまうのである。

彼らはどこで判断の基準を学んだのか。それがマスメディアでないとするなら、「都市体験」ということになるだろう。つまり、以前にどこかで自らが[11]エトクした記憶と、それを家族や知人と交換し合った体験が、自信をもってウインカーのスイッチに手をやらせるのである。その体験と記憶は、帰省やリゾートに向かう途上だったのかも知れないし、それよりはずっと近場の環状七号線でのものかも知れない。いずれにせよ、一度かせいぜい数度の「商品パッケージ」との接触体験が、今度は世田谷でそれらの飲食店を営業面で成立させる素地をつくりあげてしまったことになる。

ここで明確になるのは「視覚上位」の都市の出現だ。もちろん、これにはすでに一九七〇年代にロバート・ヴェンチューリとデニス・スコット・ブラウン夫妻が画期的な都市論の書『ラスベガスから学ぶこと（Learning from Las Vegas）』で指摘したように、「時速三十五マイルで走る車から見えるデザイン」というモータリゼーションの要請がひとつの背景として存在する。それによって、日焼け止めクリームのタニアの水着女性の巨大な看板が出現し、そこに現代都市のコミュニケーション不全を即物的に解消する鍵があるとの考え方である。しかし、ニワトリと卵が現在では逆転しているという気がしてくる。

パッケージデザインの並ぶ都市の方が現実に存在して、その既成事実が都市観を再構成してしまうという図式である。これは

体験者の年齢が下がれば下がるほど顕著であり、彼らは商品パッケージとしての風景に、都市の見方もそこでの作法も習うことになっていく。「視覚から入る」ことへの危惧と恐怖がここにある。

「空間の総商品化」という概念を持ち出したのは、ヴァルター・ベンヤミンだった。彼は二十世紀都市の赴(12)く先を一九三〇年代に予言し、一九八〇年代のバブル経済の世界的な隆起までをも見事に見通した。ヴェンチューリ夫妻が、資本主義社会によって一方的に垂れ流される工業製品をいわば「アメリカン・ヴァナキュラー」と肯定的に位置づけ、それを都市空間のヒョウショウ(13)と見なす思考も、大枠ではベンヤミンの論考の域内にとどまっていたといえるだろう。しかし、「商品パッケージが構成する都市」まで行き着いたとき、都市はついに消費物のジャンクヤードと呼ぶしかない極限に到達してしまったのである。

ここまで書き進むと、冒頭に夜景を描写したのは、必然だったとも思えてくる。都市は歩行者レベルで楽しみながら移動する場ではなく、移動過程をなかば意識的に可能な限り省略しながら、闇のなかで燦然と輝く「商品パッケージ」というオブジェクトに突き進んでいく場になったからだ。世田谷でいうなら、そこはたとえ昼間であったにせよ、快適に歩行できる場とはいえない。中途半端な自動車道路とその脇に設けられた細い歩道は、歩くという行為を不快きわまりないものにしている。ならば闇がオブジェクトまでの距離をいっそ包み隠してくれた方がよい。そう思わせるほど「商品パッケージの都市」は深く東京に浸透しているのである。

（松葉一清『モール、コンビニ、ソーホー』による）

注　タニア……タニア・ハワイ・コーポレーション。　ヴァナキュラー……その土地に固有のもの。
ジャンクヤード……廃品投棄場。

〔問一〕　傍線(6)(10)(11)(13)のカタカナを漢字に改めなさい。（楷書で正確に書くこと）

〔問二〕 傍線(1)(12)の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

〔問三〕 傍線(2)「不思議な感覚」とあるが、筆者はなぜそのような感覚を抱いたのか。その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 多種多様な大型飲食チェーン店が無秩序に建設された結果、高級住宅地に奇妙に無国籍風な光景が出現したから。

B 商業上の合理性に従って規格化された建築が即物的商品の様相を呈しつつ、周辺一帯の景観を支配していたから。

C 商業的便宜を追求した建築群は、本当に建築家がそれを設計したのか疑わせるほど一様に没個性的であったから。

D 立地条件等と無関係に建設された規格的建築が圧倒的存在感を示し、人間の生活環境と景観を破壊していたから。

E 派手にライトアップされた建築群が立ち並ぶ風景を前にして夜の闇が消失し、昼夜の時間感覚が狂わされたから。

〔問四〕 傍線(3)「建築であって建築ではない」とあるが、筆者がそのようにいう理由は何か。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 建築の無軌道な大型化が住宅地を圧迫し、都市の全体的調和を著しく損なっているから。

B もっぱら商業的便宜と消費行動の促進に奉仕し、建築としての自立性を失っているから。

C 商業的合理性に屈伏した建築には、人びとの生活のニーズを尊重する意志が希薄だから。

D チェーン店の統括本部が設計したせいで、建築における美的な視点が失われているから。

E 建築家の創意工夫が設計に活かされておらず、機械的に様式化された俗悪な建築だから。

〔問五〕 空欄(4)(5)に入れるのにもっとも適当な語句の組み合わせを左の中から選び、符号で答えなさい。

A (4)視覚 ― (5)商品化
B (4)走査 ― (5)規格化
C (4)運転 ― (5)合理化
D (4)徘徊 ― (5)合理化
E (4)駐車 ― (5)規格化
F (4)入店 ― (5)商品化

〔問六〕 空欄(7)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 客に快適な空間を提供する態度
B 規格化された空間に対する嫌悪
C 空間設計に関する建築家の理想
D 空間を質の点で差別化する姿勢
E 空間と商業活動を分離する方針

〔問七〕 傍線(8)「病んだ風景」とあるが、どのような意味で「病んだ」といわれているのか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 自動車中心社会における即物的な商業主義が、都会人の対人的コミュニケーションを危機に陥れていること。

B ドライバーの目に留まりやすい巨大な商業広告の乱立が、都市の風景を単調で味気ないものにしていること。

C もっぱらロードビジネスの舞台として機能する都市が、歩行者不在の索漠とした風景を出現させていること。

D 都市部を中心に自動車の交通量が過度に増加し、人びとの生活を脅かす深刻な環境破壊が進行していること。

E 快適な歩行を阻害する都市設計ゆえに、モータリゼーションがさらに加速するという悪循環が発生すること。

〔問八〕 傍線(9)「事態はより根源的な次元で変化しつつある」とあるが、その内容に当たる箇所を本文中から四十字以上四十五字以内で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。(句読点、かっこも一字と数える)

〔問九〕 次の文ア～エのうち、本文の主旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア　マクドナルド等の飲食チェーン店は、一般に景観破壊の象徴とみなされているが、その真の原因はむしろ店舗の無制約な大型化にある。

イ　商品パッケージ化が進行した都市空間は、人びとの個別的な都市体験のみならず、同時に都市観までも根本的に変化させつつある。

ウ　設計段階における建築家の関与が不十分なために、大半の大型飲食チェーン店の建築様式は、没個性的な規格化の産物と化している。

エ　飲食店のチェーン店化は、米国流グローバリズムの成果の最たるものであり、日常生活を便利で豊かにすることに貢献している。

二　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（20点）

古池や蛙飛こむ水のおと　　芭蕉

芭蕉の古池の句ほど広く知れわたっている句はない。この句は誕生してから三百年の間に蛙が飛びこんだ水音が広がるように広まり、今では海外にまで知られている。俳句といえば芭蕉、芭蕉といえば古池の句である。ところが、この句はそれほど人々に親しまれながら、一方では昔から謎めいた句とも考えられてきた。その最大の原因は句の内容があまりにも単純だからである。古池に蛙が飛びこんで水の音がした。えっ、それでどうした？　というわけである。そこで、この句には何か別の深遠な意味が隠されているのではないかと深読みする人々も出てきた。

芭蕉の時代から二百年後の人である正岡子規は、そうした怪しげな深読みを一笑に付して、「古池の句の意義は一句の表面に現れたるだけの意義にして、また他に意義なるもの無し。」と、喝破した。古池に蛙が飛びこんで水の音がした。ただそれだけのことであるというのである。しかし、この「一句の表面に現れたるだけの意義」とは、子規がここで自明のこととしている「古池に蛙が飛びこんで水の音がした」ということだろうか。いいかえると、芭蕉の古池の句は本当に「古池に蛙が飛びこんだ」といっているのだろうか。

芭蕉と同じ時代の摂津伊丹の人、鬼貫は早くも古池の句をもじった句を詠んでいる。

から井戸へ飛そこなひし蛙よな　　鬼貫

蛙が空井戸へ飛びそこなったといっているところをみると、鬼貫も暗黙の了解事項として古池の句を「古池に蛙が飛びこんだ」ととっていたようである。

戦後になると、高浜虚子は「『古池』の句に就いての所感」という文章を書いた。そのなかに「芭蕉が深川の庵にあって、聞くとなく聞いてをると、蛙が裏の古池に飛び込む音がぽつん〳〵と聞えて来る。」とある。ここでも蛙は古池に飛びこんでいる。

しかもわざわざ深川の庵の「裏の古池」とある。水音は「ぽつん〳〵」である。こうみてくると、古池の句は芭蕉の時代から現代までほぼ一貫して「古池に蛙が飛びこんで水の音がした」と解釈されてきたことがわかる。この点では子規が一掃しようとしたさまざまな深読みも同じだった。「古池に蛙が飛びこんで水の音がした」という解釈があっけないほど簡単なのでもっと

(1) を探ろうとしたのである。

しかしながら、この句は「古池や蛙飛こむ水のおと」であって、「古池に蛙飛こむ水のおと」ではない。ほんとうに蛙は古池に飛びこんだのだろうか。ところが、そう解釈するとおかしな問題がいくつか出てくる。

第一に、誰もが考えているようにこの句が「古池に蛙が飛びこんで水の音がした」という意味であるとすれば、「水のおと」の「水」は古池の水である。とすると、芭蕉はここで「古池や」といい「水のおと」といって同じ古池の水を二度出したことになる。十七音しかない俳句で同じことを繰り返すのは言葉の無駄である。もしこの「水」が古池の水ならば音数は足りないものの「古池や蛙飛こむおと」といえばこと足りる。音数を合わせるために「古池」と「水」が重複するのを承知で「水のおと」とする。芭蕉ともあろう人がそんなことをしたかどうか。

この疑問点を解く鍵は、蕉門随一の論客だった支考が書いた本の中にある。支考は美濃の人で芭蕉より二十歳あまり若い弟子。二十代半ばで芭蕉に入門し、実作と論考の両道にすぐれ、芭蕉没後は美濃派という一大勢力を率いた。支考の『葛の松原』には古池の句について興味深いことがいくつも書いてある。その一つはこの句は上中下が一度にできたのではなくまず中下の「蛙飛こむ水のおと」が先にできたということである。そこで上五を何としたものか、芭蕉が一瞬、黙したのだろう、すかさず、その場にいた其角が「『山吹や』としてはどうですか」と口をはさんだ。しかし、芭蕉は其角が勧めた「山吹や」を採用せず「古池や」とおいた。

まず芭蕉が詠んだ「蛙飛こむ水のおと」は当時はこれだけで驚くべき表現だった。というのは和歌や連歌はいうまでもなく、貞門、談林の俳諧においても蛙は鳴声を詠むものと決まっていたからである。この伝統を生み出した和歌ではカハヅといえば今いうカエルではなく河鹿のことだった。河鹿は清流にすむ小さなカエルで、夜、石に上って鈴を振るような涼しい声で鳴く。そ

れを芭蕉は河鹿ではなく、その辺の水辺でのどかにはねて遊んでいるただのカエルをカハヅとしてこの句に詠んだ。その座に居合わせた其角らはこの中下を聞いて「これはおもしろい」とうなずいたはずである。では、上五を何とするか。ここで其角が「山吹や」を提案したのにはこれもまた文学史的な根拠がある。和歌では古くから河鹿の声を必ず山吹と取り合わせてきた。

かはづ鳴く甘南備河にかげ見えて今か咲くらむ山吹の花　　厚見王（『万葉集』）

かはづなくゐでの山吹ちりにけり花のさかりにあはまし物を　　読人知らず（『古今集』）

『万葉集』の歌にある「甘南備河」（神無備川）はどの川かわかっていないが、『古今集』の歌の「ゐで」（井手）とは京都府の南、井手町の山あいのこと。ここを流れる井手の玉川は古くから河鹿の名所であり、また山吹の名所でもあったので、蛙と山吹はいつの間にか切っても切れない組み合わせになった。そこで、岸辺に咲き乱れる山吹の黄金色の花がまぶしく映える清流の水面で美しい声で鳴く蛙が和歌でも連歌でも俳諧でも詠まれることになった。

芭蕉の「蛙飛こむ水のおと」という中下を聞いて、其角はこの井手の蛙を思い出し、続けて蛙と一緒に和歌に詠みこまれてきた井手の山吹を連想したのである。そこで「山吹や」を提案した。これをかぶせると句はこうなる。

山吹や蛙飛こむ水のおと

『葛の松原』に書かれている古池の句が生まれた経過は以上のとおりである。問題は「蛙飛こむ水のおと」の上五は最終的に芭蕉の判断で「古池や」に決まりはしたが、一時は「山吹や」の可能性もあったということ。なぜそんなことが可能だったかといえば、「蛙飛こむ水の音」は上五がなくてもこれだけですでに完結しているからである。ここで芭蕉が何よりもいいたかったのは蛙が鳴いたのではなく飛んだということだったのであり、それはこの「蛙飛こむ水のおと」でいい尽されている。となると、上五には山吹でも古池でもおくことができた。古池の句が「蛙飛こむ水のおと」だけで完結しているということは、其角が提案した山吹も芭蕉がおいた古池も「蛙飛こむ水のおと」とは別の次元にあるものということでもある。芭蕉は古池と蛙が飛びこんだ水は別々のものであると思っていたからこそ重複など気にせずに「古池や」とおくことができた。古池と蛙が飛びこんだ水が別々の次元にあるからには、蛙は古池に飛びこもうとしても飛びこめない。仮に「山吹や」とおいた場合、其角も芭蕉も支考も

蛙が山吹に飛びこんだとは思わないことは明らかである。これと同じく「古池や」とおいた場合でも(2)蛙は古池には飛びこめないのである。『葛の松原』の支考の聞き書きをもとにするかぎり、古池の句を「古池に蛙が飛びこんで水の音がした」と解釈するのは難しいということになる。

山吹といえば蛙の声、蛙の声といえば山吹をもってくる和歌の凝りかたまった伝統に対して、山吹に蛙の声ではなく、蛙が水に飛びこむとぼけた音をぶつけて大笑いしようとしたのだろう。あの蛙、『古今集』の歌のように鳴きはしないで飛びこんだ、と。このとき、其角は和歌の言葉の因襲を批判する立場に立っている。確かに、上五に山吹をもってくれば、それに続く「蛙飛こむ水のおと」は、山吹には蛙の声という決まりきった古臭い取り合わせへの痛烈な批判になる。これが、この時点で其角が考えていた俳諧というものだったに違いない。ほかの弟子たちもこれに近い考えだったろう。それに対して、芭蕉が其角の進言をいれず、古池をもってきたのは、其角たちが考えていた当時の俳諧というものを、やはり一歩、前へ進めようとしたからではないか。一六八六年春の芭蕉には、すでに、(3)因襲へのあらわな批判もひとつの因襲と映っていたのかもしれない。芭蕉は其角や以前の自分自身の俳諧に対する考え方を批判しようとしたのではなかったろうか。そこで芭蕉は和歌のように「かはづなくゐでの山吹」とも歌わないが、其角のように「山吹や蛙飛こむ水のおと」としようとも思わない。因襲にとらわれるのでもなく、因襲を真向こうから批判するのでもない。そのどちらも超越した不思議な新しい空間に「古池や」という言葉はある。古池の句は、和歌やそれ以前の俳諧に対する芭蕉の創造的批判の句なのだ。

（長谷川　櫂『古池に蛙は飛びこんだか』による）

〔問一〕　空欄(1)に入るのにもっとも適当な五文字の語句を、本文中から探し出して答えなさい。

〔問二〕 傍線(2)「蛙は古池には飛びこめないのである」とあるが、その根拠としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 蛙が飛びこんだ水は、山吹の咲き乱れる不思議な空間であるから。
B 蛙が飛びこんだ水と、上五の古池は、因襲を超越した空間にあるから。
C 蛙が飛びこんだ水と、上五の古池は、同じ池ではないから。
D 蛙が飛びこんだ水と、上五の古池は、同じ池であるから。
E 蛙が飛びこむ音ではなく、鳴声を詠むことが文学史の伝統だから。
F 蛙が飛びこむ音ではなく、鳴声を詠むのは芭蕉の作風には合わないから。

〔問三〕 傍線(3)「因襲へのあらわな批判もひとつの因襲と映っていたのかもしれない」とは、どのようなことか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 山吹の蛙は鳴声を愛でるものなのに、それを飛びこませたのでは、あからさまで興がない。
B 山吹の蛙は鳴声を愛でるもので、それを飛びこませて批判するのは、あまりにも安易である。
C 山吹に蛙が因襲なら、それを飛びこませて批判するのも因襲であると、芭蕉は考えた。
D 山吹に蛙が因襲なら、その伝統を批判するのも因襲であると、芭蕉は考えた。
E 和歌の凝りかたまった伝統を批判することが、既に時代遅れになっていた。
F 和歌の凝りかたまった伝統を批判することが、門下の中でも意見が別れていた。

〔問四〕 次の文ア～エのうち、本文の主旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア 古池の句が海外にまで知られることになった最大の原因は、句の内容があまりにも単純だからである。

イ 筆者は、古池の句の怪しげな深読みを一笑に付した正岡子規とは、異なる見解を持っている。

ウ 和歌で詠まれる蛙はカジカのことで、渓流にすみ、美しい鳴声で知られ、池に飛びこむカエルとは別の種類である。

エ 虚子の解釈によると、同じ古池の水を二度出すのは、十七音しかない俳句では言葉の無駄である。

三　次の文章は『発心集』にある、花園左大臣源有仁の逸話である。有仁は、後三条院の孫という皇位に近い王孫で、容貌も万事の心がけにも優れ、教養のある人物だったが、源氏の姓を賜って臣籍に下っていた。これを読んで、後の問に答えなさい。（30点）

もし、仕うまつり人の中に、男も女もおのづから心よげにうち笑ひなどするをも、「かかる宿世つたなきあたりにありながら、何事のうれしき」など、聞き過ぐさずはしたなめたまひければ、初春の祝ひ事などをだに、思ふばかりはえ言はぬならひにてなむありける。春は内裏あたりもなかなか事うるはしければ、身に才あるほどの若き人は、ただこの殿にのみまうで集まりて、詩歌・管絃につけつつ心を慰むる事ひまなし。上の御兄達、はたいます。朝夕というはかりさぶらひたまひければ、大殿など申すばかりこそあれ、さるべき色々の御もてなしに変はらず、あかぬ事なく見えけれど、すべて身を憂きものに深くおぼしとりて、常には物思へる人ぞとぞ見えたまひける。

いづれの時にかありけむ、京より八幡へ徒歩より、御束帯にて七夜参りたまふ事ありけり。別当光清この事を聞きて、大きに御まうけ用意して、御気色したまひけれど、「このたびは殊更に立ち宿るかたなくて、詣でなむと思ふこころざしあれば、えなむ立ち入るまじき」とて、寄りたまはざりけり。七夜に満じて帰りたまひけるに、美豆といふ所において、御望みかなふべきよしの歌たてまつりたれば、返しはしたまはず、「これは御神の仰せなり」とて御袋に収めて、帰さに乗りたまふ御馬をぞ鞍置きながらたまはせける。御供に仕うまつる人、「いかばかりなる御望みなれば、かく徒歩にて夜を重ねつつ詣でたまふらむ」とありがたく覚えて、「いかにもただ事にはあらじ。大菩薩は現人神と申す中にも、昔の帝におはします。限りある御氏の絶えたまひぬる事仰せらるるにや」とまで、おぼつかなく思ひけるに、御幣の役すとて、近く候ひけるに聞きければ、忍びつつ「臨終正念往生極楽」と申させたまひけるにぞ、かなしくも又めでたくも覚えける。

（『発心集』による）

注　上……天皇。　八幡……石清水八幡宮。応神天皇を八幡大菩薩として祀る。　別当……石清水八幡宮の寺務を司る長。

〔問一〕 傍線(1)「はしたなめたまひければ」、(2)「なかなか事うるはしければ」、(3)「さるべき色々の御もてなし」、(5)「御気色したまひけれど」の解釈としてもっとも適当なものを、それぞれA～Dの中から選び、符号で答えなさい。

(1) はしたなめたまひければ

A やさしく擁護なさったので
B 身分の低い者として侮られたので
C はずかしくお思いになったので
D 厳しくおとがめになったので

(2) なかなか事うるはしければ

A 驚くくらいに飾り物が美しいので
B 仰々しいほどに儀式が煩雑なので
C かえって物事がきちんとしすぎなので
D むしろ行事がなくのんびりしているので

(3) さるべき色々の御もてなし

A それ相応のさまざまの御身のこなし
B 避けなくてはいけないあらゆる御接待
C 出さなくてはいけないさまざまの御馳走(ちそう)
D あらかじめ決まっているあらゆる御作法

(5) 御気色したまひけれど

A しつらえを立派になさったが
B 御機嫌うかがいをなさったが
C 御腹立ちの様子でいらっしゃったが
D わざとらしく御ふるまいになったが

〔問二〕 傍線(4)「あかぬ事なく」とは、誰の、どのような様子を言っているか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 才能ある若人の、満足できない様子。
B 帝のご兄弟達の、何の不満もない様子。
C お仕えしている人々の、満足できない様子。
D 有仁の、何の不満もない様子。
E 語り手の、満足できない様子。

〔問三〕 傍線(6)「なむ」と同じ用い方をしている「なむ」(各文中の傍線で示してある)を左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

A はかなき心地に患ひて、まかでなむとしたまふを、
B かかる御使ひの、蓬生(よもぎう)の露分け入り給ふにつけても、いと恥づかしうなむ。
C 月夜には来ぬ人待たるかき曇り雨も降らなむわびつつも寝む
D その人、かたちよりは心なむまさりたりける。
E 盛りにならば、かたちも限りなくよく、髪もいみじく長くなりなむ。

〔問四〕 傍線(7)「かなしくも又めでたくも覚えける」について、従者がこのように感じたのはなぜか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 有仁の参詣は単なる物見遊山だと思っていたのに、一族の繁栄を一心に願うためだったと知ったため。
B 有仁の心願は自身の不運を訴えるものかと疑っていたが、後世の安穏を願うことだったと知ったため。
C 有仁の心願は帝の位を狙うことかと疑っていたが、一族の血筋が絶えないよう願っただけと知ったため。
D 有仁の参詣は大がかりで従者も相当苦労したのに、願ったことが往生というくだらないことだったため。
E 有仁の心願は別当の祝いの歌によって成就を約束されたのに、願ったことが臨終正念だけだったため。

〔問五〕 次の文章のうち、本文の内容と合致しないものを一つ選び、符合で答えなさい。

A 有仁の邸では、仕える人々でも笑ったり新年の祝辞を思うように言ったりできない雰囲気があった。
B 有仁は、自分が王孫で秀でた人物であるのに、皇位の望みのないことを不運なことだと思っていた。
C 教養のある若人や帝の兄弟たちは、新春にはもっぱら有仁の邸に集い、詩歌管絃に心を慰めていた。
D 別当光清は有仁が石清水八幡宮を参詣すると聞き、ほうびをたくさんもらう心づもりで宿を用意した。
E 光清から心願成就の祝歌を奉られた有仁は、その御礼に乗っていた馬を鞍ごと引き出物として賜った。